



美歴 だより

諫早市美術・歴史館だより

CONTENTS

館長のつぶやき	2
BIREKI・レポート	3
収蔵資料の紹介	4
いさはやの歴史	5
美術の部屋	6
古文書の部屋	7
お知らせ	8

Isahaya
Museum of
Art & History
Museum News
Vol.19



架橋180年を迎える重要文化財「眼鏡橋」

館長のつぶやき

-Vol. 1-

5月のある夜、爽やかな一瞬の出会い(その1)

五月の中頃、季節はまだ爽やかな風がふく日。今日も高校を出る時刻が遅くなった。いつも親には「娘が遅く帰るのは心配」などと言われるが、どうしてもこんな時刻になってしまふ。長与町の自宅に帰るのには長崎駅20時55分発長与経由諫早行の列車がちょうどいい。

諫早駅には20時40分には着いた。ホームに向かうと既に列車は待機していて乗り込むことができた。列車は座席が窓際の両方に縦一列に並んでいる型だった。かろうじてホームを背に空いている席にすわることができた。発車の時刻までに満席で吊革につかまっている人も増えてきた。

発車5分前、スーツ姿でノーネクタイ、ビジネスバックを片手に持つ、年は50歳後半から60歳前半か、と思われる男性が乗車し私に背を向けて反対側の吊革につかまっている。彼の前には、大学生くらいの男性とその左隣には薄手のコートを着た女性が座っている。ほとんどの乗客は携帯電話に集中している。男性の前に座る二人も同じだ。

私はぼんやりと前を見て座っていた。背を向けて立っている男性はバックから携帯電話を取り出し、手にしていたバックを左肩にかけた。列車が発車しだすとバックを肩からはずし左手に持ちなおした。右手は吊革をにぎっているので携帯電話はスーツの内ポケットかどこかに直したのだろう。間もなく浦上駅に着こうかという頃、彼は体をずらし足元を気にする素振りを見せた。浦上駅で列車が止まると、再び下を向き足元をしばらくみている。

発車して間もなく、彼の前に座っている男性が、自分の足元から何か小さな物を拾い、彼に渡しているようだった。彼はそれを受け取り軽く会釈しているのが見えた。

五月の中頃、今日私はノーネクタイだがスーツを着込んで、用務のため長崎市へ出張した。用務には夕刻からの懇親会もある。それが終了し諫早市の自宅に帰るため、長崎駅21時19分発シーサイドライナー佐世保行に乗ろうと長崎駅に急いだ。

隣のホームに20時55分発長与経由諫早行が止まっている。調べると下車する駅には、これが10分程早く到着することがわかった。発車まで5分。この列車に乗り込んだ。

席は満席で座れない。ホームとは反対側の座席を向いて右手で吊革をにぎった。前には大学生くらいの男性、その左隣には女性が座っている。二人とも携帯電話に夢中だった。周りを見るとほとんどの乗客が携帯電話を見ている。一昔は、乗客の半数ぐらいは文庫本を開いて読んでいたのに、列車の中の風景も様変わりしたなと思いつつ、私は発車までの5分間を待つつもりだった。

だが、5分という間が持たず、左手に持つバックから携帯電話を取り出し、バックは左肩にかけて、インターネットニュースを一覧した。列車の発車アナウンスが流れ、携帯電話はスーツの内ポケットへ、バックは左手に持ち直し、右手はまた吊革をつかんだ。

発車して間もなく、スーツの左襟につけていた「ココロねっこバッジ」がないことに気づいた。何気ない風を装って足元を探してみたが、バッジの表も留めるピンも見当たらない。浦上駅で停車して再度探してみても同じだった。

発車して間もなく、前に座る男性が、自分の足元に落ちていたピンを見つけ拾って渡してくれた。「あ！、ありがとうございます。」とお礼を述べ会釈した。だが、このときはまだバッジの表は見つからない。



ココロねっこバッジ

※この続きは次号で。

(右欄は事実です。左欄は出会った相手の方です。想像も含まれます。)

BIREKI・レポート

Vol.10 諫早市美術・歴史館は展示だけじゃない！？

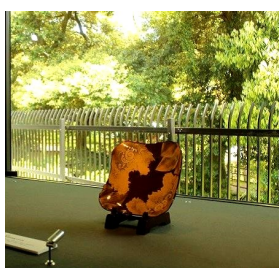
諫早市美術・歴史館は、2014年3月1日のオープンから、おかげさまで今年で5年を迎えました。常設展や企画展はもちろんのこと、市民の皆様の文化活動の場として活用していただいています。

さて、当館は毎年4～5月に、常設展示室「諫早の美」のコーナーで「プレゼンテーションウォール開放」を行っています。このコーナーでは、普段は焼物、絵画、掛軸などを外部の光が入らない空間で展示していますが、（絵画や掛軸は紫外線や赤外線に弱く資料の痛みの原因になるのです…>_<;）、このプレゼンテーションウォール開放期間は外部からの光を遮断するための壁を取り除き、外からの光と新緑、繊細で美しい焼物のコラボレーションを楽しむことができます。

実は、、、このプレゼンテーションウォールが高く評価され、「2015年度グッドデザイン賞」を受賞しています。（プレゼンテーションウォールだけでなく、高城回廊などの周辺の環境と調和のとれた印象的な外観デザインなどや機能的な展示空間なども評価頂きました！）

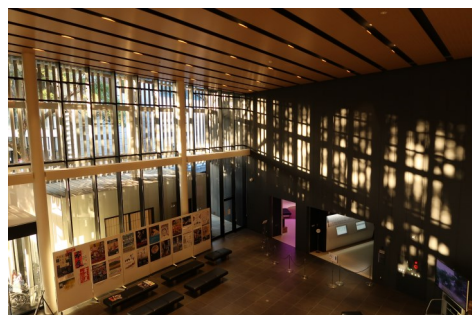
最近では企画展や常設展だけでなく、建物の写真を撮りに来られる方も…！

意外と知られていない諫早のオシャレ写真スポット、ぜひ皆様も遊びに来てください😊

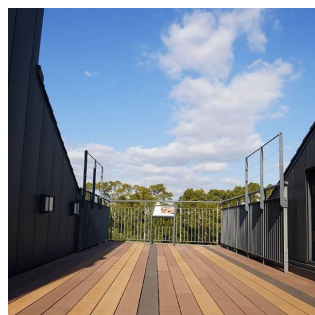


常設展「諫早の美」プレゼンテーションウォール

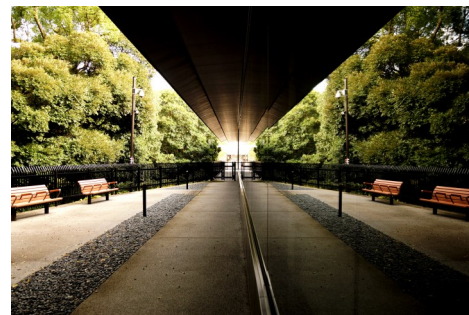
外でくつろぎ中の猫をたまたま発見！外の景色も楽しめます！



夕方になると日が差し込んでとっても綺麗！



屋上の展望テラス



外のガラスが大きな鏡に！



企画展・講座・イベント情報などは当館インスタグラムで詳しくご覧いただけます。（福井遥香）

収蔵資料の紹介

VOL.2 土師野尾焼

市内土師野尾町の八天岳山麓で焼いていた唐津系の陶窯です。窯跡が昭和2（1927）年に金原京一（陶片）氏により発見されました。当初は、文禄・慶長の役の折に龍造寺家晴が朝鮮より連れ帰った陶工により始まったとされていましたが、昭和59（1984）年の諫早市教育委員会が実施した発掘調査により、龍造寺氏以前の西郷純堯〈さいごうすみたか〉の時代の16世紀ころの窯であることが判明しました。唐津系陶器窯のなかでも最も古い時期のもので、諫早では最古の窯です。中道とハラタラの二ヶ所の窯跡が確認されています。薄作りを特徴とし、製品は皿や鉢、甕などの庶民の日常雑器が主でしたが、なかに茶陶も焼成していました。作調などには高麗末から李朝初期の影響がうかがえます。

佐賀、長崎は焼物（磁器）の産地として著名で、すでに慶長10（1605）年頃には有田で磁器を焼いています。そのすぐ後の元和2（1616）年には、有田泉山で、寛永10（1633）年には針尾三ツ岳で白磁鉢が発見されると白磁生産が本格的にはじまり、日本窯業の一大拠点の位置を築きます。その製品は、現在までも肥前の焼物として有名ですが、肥前で焼物が焼き始められるのは、1570年～元亀〈げんき〉にかけての頃で、灰釉陶器〈かいゆうとうき〉が焼きはじめられます。

土師野尾焼はこの頃の窯で、16世紀、西九州を拠点にはじまった岸嶽系古唐津〈きしだけけいこがらつ〉とほぼ同時期の操業です。岸嶽（佐賀県唐津市）は唐津系窯業の拠点で、波多氏が岸嶽城を構え、そのまわりに幾つもの窯が焼成していましたが、文禄2（1593）年、城主波多氏が豊臣秀吉により追放されると、そこでの焼成に従事していた陶工たちは四散（岸嶽崩れ）してしまいました。唐津系をはじめ陶器は茶道、わび茶の流布とともに各地でその道具として名物が焼かれますが、江戸時代に入ると、染付や色絵といった磁器製品がもてはやされ広く普及し、さらにはそれが海外貿易での輸出の主力品ともなると焼物は白磁生産主体へと移ります。

そうした流れのなか、陶製品を供給した土師野尾焼は閉窯の時期はわかりませんが、受け継がれることはありませんでした。しかしながら諫早の焼物の歴史のなかでも最古期にあたる16世紀まで遡る貴重な焼き物、土師野尾焼として伝世しています。



三耳付葉茶壺

1570±30（残留磁気測定値）

口径10.4 底径14.3 胴径25.0 高32.0



ハラタラ窯跡



中道窯跡

(前号からの続き)

一 御通路筋に茶畑見渡りこれあり候、右上納相懸け哉と、相尋ねられ候節は、少し上納相懸け候旨、御答え申し上げ候様の事

一 諫早町数・家数並び人数、相尋ねられ候はば、町は五町、家数五百軒余り、人数は二千人余りの由、御答え申し上げ候様の事

付けたり、湯江・多良にて、宿内家数並び人数等、相尋ねられ候はば、覚えの分、大図を御答え申し上げ候様の事

一 帆別銀の義、相尋ねられ候節は、帆一反に付き、銀一匁五分宛の由、其外津方に相掛け候義は、一体は御役方より御含め書きの通り、津別当能く差し心得、御答え申し上げ候様の事

一 御前、御石高相尋ねられ候節は、高二万六千石余りと、御答え申し上げ候様の事

付けたり、御新田有無の義、相尋ねられ候節は、村により新田少々充これあり、田数の義は、村役にも其懸り懸りもこれある儀に付き、睨と相覚えざる旨、相答え候様、尤も、大庄屋其外へ重畳、相尋ねられ候節は、取調子申し上ぐべく旨相答え、一往引き取り候上、此帳面に書き載せこれある新田石高を、御答え申し上げ候様の事

一 諫早郷中、竈数並び男女惣有り高、御尋ねの節は、御蔵入・御私領相込みにして、小割りの義は相答えず、二口メ高を、御答え申し上げ候様の事

有 人数五万四千七百十二人

内

男二万七千四百四十七人・女二万七千五百十五人

※男女の合計人数が合わない、原本のまま

一 御通り筋村名・石高等相尋ねられ候節は、左の通り、御答え申し上げ候様、尤も、白濱村は御通り筋より人家相見えずに付き、東長田村へ盛り込み相答え候様、尤も、宇良村より大浦村迄の処、御役方よりの御差し図書きに村名・石高、書き載せこれなきに付き、右差し分け候上、猶又、申し達すべき事

付けたり、有喜村も本條同断

松平肥前守領内、御通り筋、御左右の村々石数高

高来郡

此所々、神代村々書き載せ有り

御右杵谷村 高二十五石一斗七升

御左右唐比村 高百十四石六斗八合

外に、新田高四十五石七斗五升八合

御右井牟田村 高三百石七升五合

外に、新田高百十七石五斗七合

御左有喜村

後で、付紙にて御相見候事

此村、御役方御差し図これなきに付き、尋ね込み置き候事

高千五十石二斗一升三合 有喜村

内、新田三百三石五斗六升四合

※ゴシックは朱書き

(以下次号)

Vol.7

美術の部屋

諫早ゆかりの日本画家 八十島又橋 やそしま・しゃきょう 1832-1916 (天保3年～大正5年)

八十島又橋は天保3年諫早市田町（今の栄町）に生まれました。福田渭水の門下に学びましたが、20歳の時京都に遊学して、日根対山に山水画を、前田暢堂に花鳥画を学びました。諫早に戻った後は、当時長崎に来ていた支那の画家徐雨亭に入門し画風が一変したといわれています。

京都や静岡で人気を得たとされていますが、出身地諫早にも多くの作品が散逸を免れ残されています。この度、故中村馨氏が長年収集された、又橋を始めとする諫早・長崎ゆかりの美術品の寄贈を受けました。下にその一部を紹介します。これらの作品は令和2年1月4日から開催する「書・日本画（中村馨コレクション）」に展示する予定です。



八十島又橋《山水図》
(中村馨コレクション)



八十島又橋《雁》
(中村馨コレクション)



八十島又橋《梅》
(中村馨コレクション)

古文書の部屋

中世の古文書の特徴

これまで近世文書、主に江戸時代以降に使用されてきた文書の中の言葉や表現についてご紹介してきました。古文書を時代別に分けたとき、近世以前、平安時代から鎌倉時代を経て戦国時代に至る中世にも特有の表現や言い回しがあります。

今回は、中世の古文書の大まかな種類と使用される文言の一部をご紹介します。

◎ 中世文書の分類

寺社文書：寺院・神社で作成・伝来した文書

- 古来、文書作成能力や紙の材料などの制約のほか、教育・文化の中心で管理機構も整っていたことから文書の残り具合は多い。宗教関係以外では、権力者から寄進された荘園や寺社領での訴訟などに関する文書を多く含む。

公家文書：太政官などの官吏や公家・皇室関係の文書

- 公家の歴史は長いが、度重なる火災や戦乱の影響で残存数は意外に少ない。家の相続や官職、家産関係の文書が多い。
〈例：綸旨(りんじ),官符(かんぷ)など〉

武家文書：鎌倉時代以降、勢いを持つ武士階級の家の文書

- 戦国時代を生き残った武家に多くの文書が残りやすい。伊達家・上杉家・毛利家・小早川家・相良家・浅野家などが有名。所領の形成、家の相続のほか、各地の政治経済に関する記述も多い。
〈例：印判状,軍勢催促状など〉

◎ 頻出用語の例

・「者」(てへり)—— 読み:てえり/意味:以上のごとくである。

「～とい(言)へり」という言い回しが短縮したもので、上の文章を引用し、強調する文末表現。文中で使用すると、「てえれば」と読む。

・「稱」—— 読み:いわく/意味:～がおっしゃるには。～が言うことには。

書札礼(書状を書く際の儀礼的作法)における書状の冒頭に表記する書出文言の一つ。

使用例) 被綸旨稱:りんじをこうむるにいわく

・「故」—— 読み:ことさらに/意味:格別なさま。

書札礼における書状の末尾に表記する書止文言の一つ。

使用例) 故下:ことさらにくだす

…など

お知らせ

発行日：令和元年7月

館企画展

諫早大水害展

—昭和32年と昭和57年の水害—

諫早市は、昭和32年(1957)7月25日と昭和57年(1982)7月23日に発生した大水害により、甚大な被害をこうむりました。今回は、昭和32年諫早大水害時の諫早市に加え、昭和57年長崎大水害時の飯盛町を取り上げます。被災状況や人々の復興していく姿を振り返ることにより、近年繰り返し発生する水害への警鐘とするための企画展です。

会期 7月17日(水)～8月19日(月)
10時～19時※最終入場は18時30分
毎週火曜日は休館

会場 美術・歴史館1階ホール

観覧料 無料

千々石ミゲル墓所推定地出土遺物を
展示します-常設展示室-

平成29年の発掘調査で出土した遺物（副葬品など）の一部を展示します。

◆ 期間限定 ◆

とき 8月7日(水)～9月2日(月)
ところ 美術・歴史館 1階 常設展示室
開館時間 10時～19時(最終入場18時30分まで)
休館日 毎週火曜日
観覧料

高校生・大学生・一般：200円
団体(15人以上) 160円
小学生・中学生：100円
団体(15人以上) 80円

※市内在住または市内在学の小・中学生は無料
※教育を目的として、小・中・高・特別支援学校生などが利用する場合は、引率の教員を含め無料

館講座

歴史講座

『佐賀藩諫早領一前編』

とき 8月10日(土)
13時30分～15時30分
ところ 美術・歴史館 2階研修室
内容 西郷氏と龍造寺氏の高城攻防、佐賀藩諫早領の成立などについてお話し
講師 大島大輔(美術・歴史館専門員)
その他 受講料無料、事前の申し込み不要
※『後編』は9月21日(土)開催予定

貸館の利用について

美術・歴史館のホール、企画展示室、研修室はどなたでも利用できます。(要予約・有料※減免制度があります)ただし、利用目的が美術(写真、漫画を含む)、華道、茶道及び歴史などに限られております。詳細は、お気軽にお尋ねください。

個人やグループでの作品発表の場、歴史等の勉強会などにご利用いただいています。

— 編集後記 —

今回の表紙は、国指定重要文化財「眼鏡橋」です。

架橋から一八〇年を迎える今年、諫早市内で眼鏡橋に関するイベントが開催されています。

ポスター、チラシなどでは「諫早眼鏡橋架橋一八〇年の口ゴマーク」が見られます。たまに、「つないさん」がいそがしいです。見つけてみてください。



(野田さやか)